

音の今町の黒崎

新聞からたどる黒崎の歴史 (五十一)

「黒崎村人会」名誉会長には、黒崎村上新田の

旧家宗村権四郎家出身、宗村三松氏が選ばれた。

(先月号からの続き)

戦後の新潟市につくられた「黒崎村人会」

昭和三十五年「新潟県展望」記事より

黒崎村は、新潟市の隣組とあって、同村出身者は七千人とも一万人ともいわれるほど多くの方々が在任しておられるが、この出身者の中で明治、大正の頃には村人会的な集いもあつたが、互いに協和親睦の実をあげていたが、時代の流れとともにいつか立ち消えていった。遠く異境にあつてというのではなく、同郷出身という身近な結縁はたち切りたい親愛のこもるものであり、なんとか郷土出身者を糾合して「村人会」をつくらうという声があちこちから聞かれていた。ところで、いよいよ機が熟した昨年九月、志を同じくする有志十七人が相集まつてこの際、「黒崎村人会」を結成し、広く会員募集を始めようということに意見がまとまり、席上、愛と徳と力の三徳向上、豊かな人間を造るといった方針貫徹のため、

先ず郷土を愛し、祖先を崇び、ひいては会員一同の親睦と万一会員家族の間に不幸、心配事の生じた場合には会員が力を合わせて、その解決に努力する。また、各自の職域を通じて社会奉仕の出来るような会を作ろうという本会の趣旨を決定し、早急結成をめざして連日、東西奔走、あの人この人と連絡をとり会員獲得が始まった。発起人会では、年内に結成会をと一応目標がうち出されていたが、実際運動となると何かと思うに任せず延々している内に、本年四月の選挙とぶつかり、選挙運動と誤解されてはと発会式は選挙の終わった後にということになった。

昭和二十五年七月二十六日午前十一時、待たれた発会式は白山神社々務所に開かれた。当日は快晴、早朝より熱心な会員が続々とつめかけ、知人を求めて三々五々打ちくつろぎながら開会を待つ風景はまことに村人会にふさわしいものであった。定刻開会型の如

く規約の審議が始められたが、若干の質疑のうち原案が承認された。席上には、新しくこの日のために作られた団旗のもとに武田黒崎村長、岡田県会議員もわざわざ来賓として顔を見せ祝辞が述べられた。会議終了後は、祝宴にうつり会員の懇談が深められ午後二時すぎに散会された。

当日、役員として名誉会長 宗村三松、会長立石善次郎、副会長味方善吉、同山田一一、事務長大湊基道(箱田五郎一)の諸氏が選ばれた。

村人会の役員及び会員の紹介

名誉会長の宗村三松氏は、黒崎村上新田の旧家宗村権四郎家の出身で、新潟市本町通り十番町で外科医院を開業、外科医院の少なかつた当時(大正末期から昭和初期のころ)、名医の評判高く黒崎村からも大勢の患者が通院していた。

新潟市在住黒崎村々人会結成

夢と徳と力の三徳向上
豊かな人間形成

山田一一

宗村三松

立石善次郎

味方善吉

大湊基道

た。

会長の立石善次郎氏は、大野七区の出身で、有名な東亜同文書院で学び、戦前に一家は中国に渡り、山東省青島で大阪商船の重役となる。終戦で帰国、新潟海陸運送株式会社を創立し、同社の監査役を勤め、傍ら新潟市東大畑町でヤマト商事株式会社社長を務める実業家であった。

副会長の味方善吉氏は、金巻石附組の出身で、新潟市本町通り七番町味方ガラスの社長である。

同じく副会長の山田一一氏は、大野仲町料理業新潟屋の出身で、新潟市沼垂の青果間屋株式会社山田商店の代表取締役である。

事務長大湊基道氏は、大野諏訪町箱田自転車店箱田三男氏の叔父にあたる人で、五郎一といったが新潟市礎町の大湊家に婿入りし大湊基道と改名、自転車店を開業、後に新潟市自転車商組合長を務める。以上が黒崎村人会の役員である。

次に新聞下段広告欄に掲載されている同会の会員を紹介するが、その肩書き、名前は当時新潟市でも知られた存在の人たちである。

大野八区徳永家の出身で、新潟市礎町通りに朝鮮料理食堂大徳を経営、新潟市鮮魚商組合連合会長を務める徳永徳西氏。大野新町(現興野一区)

(続く)